文部省選定
芸術作品賞
優秀映画鑑賞会推薦
日本映画ペンクラブ推薦

日本紹介映画コンクール金賞
優秀映像教材選奨優秀作品賞

民俗芸能の心

——琵琶湖・長浜——

曳山まつり

作　品　名：シリーズ〈民俗芸能の心〉
琵琶湖・長浜「曳山まつり」
（35㎜／カラー／32分）

企画製作：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製作協力：株式会社英映画社

監　　修：高橋秀雄

製作スタッフ：

製　作	服部悌三郎	録　音	加藤　一郎
	宮下　英一	撮影助手	小林　治
脚本・監督	松川八洲雄		中井戸　伸
撮　影	江連　高元	録音助手	井橋　正美
照　明	前田　基男	タイトル	菁　映　社
演出助手	鈴木　康敬	ナレーター	原　ひさ子
照明助手	北沢　保夫	製作担当	内海　穂高
録　音	録　音　処	現　像	東洋現像所

協　　力：文化庁文化財保護部　長浜市教育委員会
長浜曳山祭保存会　長浜曳山祭囃子保存会

霊峰伊吹山のふもと、湖北・長浜は、昔から琵琶湖の交通のかなめ、大陸の文化を奈良・京都へと運んだ町。そして、とりわけ絹は、元禄期に「浜ちりめん」となって日本中に広まり、この地は商業・工業の一大中心地として栄えた。

寒風に舞っていた粉雪が、いつしか春風に乗って桜吹雪に変わるころ、この町は、にぎやかなシャギリの音とともに一挙に活気づく。春の饗宴「長浜・曳山まつり」だ。

まつりの中心はなんといっても子供狂言。曳山の舞台で5、6歳から11、12歳までの男の子が、それぞれの役のかつらや衣裳をつけて、実に可憐で堂々とした役者ぶりを披露。さながら錦絵を見るおもい。

このまつりの準備は、まだ春の先触れも感じられない2月初めごろから進められる。春休みに入るといよいよ稽古が始まる。若い衆は手分けして、家庭教師のように役者を担当し、親以上に世話をする。役者がすべて。ほかの山組には負けられない。幼い役者たちも与えられた役を懸命に学ぶ。4月に入る。そして、裸まいりとともにまつりのエネルギーは一気に過熱。本日(ほんび)を迎える。

曳山の舞台の周りは名演技を見ようとぎっしり人垣でうまる。かわいい役者が見得をきる。「待ってました！」「親の顔が見たい！」その身ぶりに目に涙さえ浮べて、うっとりと見入る人。太棹で誦じる浄瑠璃を口ずさむ古老たち。あちこちで「きれいやな」とか「どこどこの子やでー」とかささやきながら熱い視線をそそぐ観衆。

記録によると、200年以上も前に今のまつりの形式はすでに完成されていたという。裕福だった町衆たちは、12の山組それぞれに財をかたむけて曳山を豪華に飾りたてて、そしてその曳山の上で子供狂言を競いあう。これは当時の新らしもの好きの町衆たちの思いついた新らしい趣好だったのだろう。

山組ごとに「中老」と呼ばれる町衆と、働きざかりの「若い衆」、そして男の子たちの「役者」と、この3世代がともに力を出しあってまつりは実現される。そして何よりもユニークなのは、まつりの主役の座を子供に占めさせている仕組みである。すなわち、狂言を演じた子供たちは、必ずまつりの魅力にとりつかれ、若い衆に成長したら、自分のことのように子供役者の面倒をみる。そして町衆となっては当然のことのように、まつりの負担人となって盛りたてていく。つまり、この3世代の絶え間ない更新は、まつりを永久に存続させることになるだろう。という先祖のあざやかな思いつきに気づくのである。

千秋楽。シャギリが郷愁に追いうちをかける。やり遂げた男たち。まつりの終りはまつりの始まり。長浜の町のどこかで男の子が生れる。またまた、まつりは続くに違いない。

祭りの日程

4月9日～12日	線香番 裸まいり
13日	御幣迎えの儀 神輿出御の儀 くじ取り式 曳山狂言執行
14日	曳山狂言執行 登り山 役者夕渡り
15日	春季例祭執行 役者朝渡り 長刀組太刀渡り 翁招きの儀 奉納狂言 道中狂言 お旅所神前狂言 神輿還御の儀 戻り山
16日	御宴狂言執行 子供狂言観劇会
17日	御幣返しの儀

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture
公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団
http://www.polaculture.or.jp
〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-2-10 ポーラ第2五反田ビル
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597

© 3,000 99・10